

物名を詠むこと(二)

—歌合と歌学書における「物名」—

三木 麻子

キーワード：物名歌 折句 沓冠 文字 音 詞

はじめに

『古今和歌集』巻十および『拾遺和歌集』巻七には「物名」の部立が見える。歌合の場においても、「宇多院物名歌合」(注1)(延喜五(九〇五)年までに成立か)を初めとして、「東院前裁合」(延長五(九二七)年成立か)や「近江御息所歌合」(延長八(九三〇)年以前の成立か)など、植物名を題として物名歌が詠まれたものもあり、また、「亭子院女郎花合」(昌泰元年(八九八)年成立)のように、物名歌を含み、「これはあはせぬうたども」と記された沓冠歌と折句歌まで詠まれた催しも行われている。

勅撰集の部立には『拾遺和歌集』以降、「物名」が現れることはないの、『古今和歌集』成立直前からおよそ百十数年の間、盛り上がりを見せた詠歌方法であると思われる。以降、物名歌が詠まれないということでは決してないが、この「名」にこだわる意識

がある時期、時代を席卷し、その後、和歌は「こころ」(主題や詠歌内容を重視して詠まれるようになる。少なくとも「こころ」(詞)と「こころ」(心)が対等ではなくなると言えるのではないか。

貫之が「やまとうたは人のこころをたねとしてよろづのことはとぞなれりける」(古今集仮名序)と述べた「こころ」と「こと」のは、和歌の生まれる契機を述べるために出されたもので、「かくてぞ花をめでとりをうらやみ、かすみをあはれびつゆをかなしぶ、心ことばおほくさまさまになりける」を見ても、ここにいずれかを優先する意識はみえない。ところが、

凡そ歌は心ふかく姿きよげにて心にかしきところあるをすぐれたりといふべし。……心姿あひ具することかたくば先づ心をとるべし。
(新撰髓脳)

という公任の言は、「心」重視であることは間違いない。平安初期の和歌が「心」を重んじる詠歌の思想にとらわれるまでに、詞と心が同様に重んじられ、楽しまれた時代の一端が物名歌に現れているといえるのではないだろうか。和歌の「詞」について考えてゆきたい。いったん、平安期を締めくくる『八雲御抄』まで下が